

〈書 評〉

アレホ・カルペンティエル  
『エクエ・ヤンバ・オー』

(平田 渡訳 関西大学出版部 2002年 290頁)

片 倉 充 造

昨年「書評」で取り上げた『バルン・カナン』(田中敬一訳, 行路社, 2002)も, “九人の神々”を意味するメキシコ・チアパス州マヤ語の耳慣れない書名であったが, この表題作も, カリブ海地域キューバのヨルバ語(ルクミー語)で, “神々よ, 御名のたたえられんことを”を意味する, 同じスペイン語圏での土俗性豊かな名作文学である。〈炎熱の気候, 冷水の美味さ, サトウキビの万能性, 乗り合いタクシー, マキナ=自動車, グアグア=バス, コッペリア……〉は, 以前ハバナ郊外に「ラテンアメリカ映画学校」を訪問した際の評者の思い出深いキューバの記憶の数々である。また, 同地でメキシコ革命の文学作品が, 簡素ではあるにせよ, 出版されていたことは, 新鮮な衝撃でもあった。

スペイン語で著された『ラテンアメリカ文学史』では頻繁に取り扱われていたように, 本書は邦語・翻訳書籍でも, ジャック・ジョゼ『ラテンアメリカ文学史』(高見英一・鼓直訳, 白水社, 1975)での「キューバの黒人小説の源流」や, 神代修「ラテンアメリカ文学の流れ」, 『世界短編名作選ラテンアメリカ編』(新日本出版社, 1978)での「ネグリスマの代表作」, そして先年出版された鼓直『ラテンアメリカ小説の世界』(北宋社, 2000)での「アフロキューバ的な雰囲気」の横いつする小説」や, キューバ文学の変遷を丹念にたどった評論集野谷文昭『マジカル・ラテン・ミステリー・ツアー』(五柳書院, 2003)での「黒人芸術運動」など, 米国の豊穡な黒人文学とは少し趣を異にしながらも, 「良品」として注目されていたようである。

さてA5版290頁Ⅲ部43章で構成される長編小説の訳書をいざ手にとって見ると, “魔術”あり, “神話学”あり, “悪魔”ありで, なかなか難渋な翻訳作業であったと思われる。かなりの年限をかけ, 慎重に日本語化されたものと見受けられる。小説のストーリーは単純で, 主役キューバ人メネヒルドの誕生から成長, そして恋愛(不倫)・結婚がこじれての暴力沙汰による入牢・下獄・報復・逝去・子供の誕生(再生)という早回しの人生を活写したものである。これに濃密な自然・風土, 呪術性に代表される「黒人文化」, 米系の砂糖キビ工場の進出(経済帝国主義)が複雑に絡み合っていて, 平板なりアリズムに飽き足りない読者に充分応えられる著作である。それでは, 順を追ってテキストの検討を略述したい。

## I 幼少年期（1 風景 a～11 暴風 d）

「1 風景 a」ではさっそく、サン・ルシオ砂糖工場とウセビオ・クウェーを中心とする家族の暮らしぶりが如実に描写されている。米国人経営の砂糖工場が“帝国主義の申し子”のようにエネルギーに肥大化していくその時代状況は、「2 年前〈鮫〉（サメ漁が好きだったホセ・ミゲル・ゴメス大統領の綽名。在位 1909～13 年）が出した大統領令のおかげで」（p. 5）という記述ですでに史的暗示がなされている。父ウセビオ・クウェーと母サロメーとの間に誕生したメネヒルドの生育は、豚、蟻、牝鶏など、言わば、「自然」との共生を思わせるものだった。それはまた、幼年主人公が蟻に噛まれたときの、治療師ベルアー爺さんによる民間療法（ボア蛇の脂塗布）への依存（「5 治療 a」）でも裏打ちされている。やがて「6 去勢された牛」では、砂糖工場 vs 伝来の畑を所有する零細農家とのせめぎ合いが重なり、ウセビオも農地を不本意にも売却する。この章ではまた、「教育問題」が提起されている。「地方警察のお回りが、子供は学校に通わず決まりになっているんだ、と当てこすりを言ったが、なににもならなかった。ウセビオは、せがれの手を借りなくちゃ、仕事にならんのだからしょうがないだろう、とすごい剣幕で食ってかかり、自分の考えをまくしたてた。（略）教育ってのはほんとに人が言うほど役にたつんだらうか、と疑り始めた。」（pp. 25-26）との叙述は、まさしくロペス・イ・フェンテス『インディオ』（1935）やロサリオ・カステリャノス『バルン・カナン』（1957）などの一連のメキシコ・インディオ小説と符合するものであり、子供の教育機会を貧困が蝕む構図が確認できる。「7 リズム」での、〔直感と神秘に満ちた遠い昔の調べがよみがえっていた〕（p. 28）とされるものは、まさにウセビオの仲間やメネヒルドらによる音楽や踊りのことであり、これは同時に、キューバ通の村上龍が『KYOKO』で探求した“自己解放の場”であったと言える。「8 暴風 a」や「11 暴風 d」では、マージナルな霊媒師パウラ・マチョが登場し、その行動にはかなりグロテスクな描写も見出されるが、作者はハリケーンの惨状を交響曲の“音楽性”で緩和したように、パウラとサロメーの会話は、一流のコメディリリーフになっている。『さっき巡査が 2 人やってきて、そんなこと言ってたけど』とそっけなく答えた。『なあんだ……だったら来るんじゃないなかった……ツイてないわ……暴風がきても、この家が持ちこたえられるといいんだけど』／『こないだ 5 日間ずっと吹き荒れたときだって、ちゃんと持ちこたえたんだから、大丈夫だよ。』（『気のふれた女』）はこうあてこすりを言った。『もっと頑丈な家がつぶれたこともあるわ……』そう言われると、案の定サロメーは、心配な顔つきになった。（p. 39）

## II 思春期（12 聖霊～28 男らしい男）

肉体的にも屈強な 17 歳の労働力に成長した主人公の恋愛を描く時代。初恋のロンヒーナをめぐる、その配偶者（ハイチ人のナポリオン）を負傷させた“傷害罪”で、警察に逮捕されるまでが叙述されている。この章では、思春期一般の性的エネルギーの噴出を描くだけにとどまらず、

「12 聖霊」では、「サロメーは、メネヒルドが生きていくために必要な宗教の手ほどきをしてやった。数か月前に息子を祭壇前に座らせ、はじめて〈偉大なるもの〉の神秘について話してきかせたが、(略)サロメーが洩らしてくれた神話について、しばし思いをめぐらした。(略)この世で目に見えるものは、どうでもいいものばかりだった。」(p. 58) というように、黒人固有の世界観が世代間で伝授されるとともに、「人間のあいだには、秘密のつながりがあり、隠された手段を知っていれば、動かせる力があつた。」(p. 59) のとおり、黒人秘密結社の社会的機能をも示唆している。つづく「黒人は何世紀にもわたって親から子へ国王から王子へ、先覚者から祈祷師へ、大いなる知識の伝統がうけつがれてゆく術を身につけている。」(pp. 59-60) は、粘り強い黒人文化の継承を表象している。現に恋に落ちたメネヒルドは、母親サロメーと旧知であった呪術師ベルアー老人に相談を持ちかけ、老師主宰の“魔術”が施されることで、物語のアクションが展開する。

いつ、いかなる状況にあつても、絶え間なく容赦なく操業を継続する米国人経営の砂糖工場の存在は、やはり揺るぎない「黒人文化」の脈動と拮抗するものになっている。だが、作者カルペンティエルは、反帝国主義的なプロパガンダを反復する平板なリアリズムに終始することはなく、黒人世界の「現実」を提示して見せる。

### Ⅲ 都会 (29 線路～43 メネヒルド)

ここでは、主人公の列車による護送—後悔—都会到着—入牢—所内の様子—面会—出牢—結社への入会—ロンヒーナとの安定した生活—結社間の抗争による早世—子供の誕生のドラマが描かれている。「29 線路」にしろ、「30 旅」にしろ、メネヒルドの都会への道程は、半ば旅行気分であり、車窓の風景を講評する余裕すら見せているが、都市住人たちの冷たい視線には、『ああ、そうだと、おれは黒人で、しょっぴかれてくるところなんだ。』(p. 158) と自嘲的な態度も描出され、「31 鉄格子 a」～「33 鉄格子 c」までの“ムショ”生活の緊迫感へと滑らかに繋がっている。またこの獄中 3 章は、もちろん訳者により、セルバンテスのピカレスク小説『リンコネーテとコルタリーリョ』とも比較されている。“娑婆”での悪行ぶりが幅を利かせる所内で主人公は萎縮を覚え、加えて悪人の性状を扱うものの筆致はさほど暗澹とはしていない。ルベン・ロメロの『ピト・ベレスの自堕落な人生』(1938, 行路社, 2000) の所内での明朗さほどではないにせよ、キャラクターの素朴なユーモアは、絶妙である。入所資料となる撮影に際して、「無邪気にも(主人公は)さっきとられた写真は、出所のときもらえるんですかと訊いた。すると次のようなそっけない命令が返ってきた。『17 番監房へつれていけ。』」

出所については、26 章の中心人物アントニオが、「『なにごとにもコネの力だよ。コネってやつが大事なんだ。政治と降霊術、それに秘密結社のうしろ盾があつたら、1 ペソのロケット花火みたいに、いっぺんに天まで昇れるぜ』」(p. 177) の言葉そのままに尽力し、ウニータ市会議員や弁護士の働きかけで“出所”の手配が整えられる。これがガルシア・マルケスの文学世界『エ

レンディラ』なら、ヒロインを修道院から“救出”するのは是非なくオネシモ・サンチェス上院議員に解決を依頼する場面でもあろう。あの議員の演説も、陳腐で抽象的で説得力に乏しく、それはつまり、選挙民を欺くためのものでしかなかったが、読者は、同様の政治的風土を認識することだろう。

表題同名の章「35 エクエ・ヤンバ・オー」は、首尾よく出牢できたメネヒルドが、アントニオの勧めもありいよいよエネジェグジェー結社の会員になる儀式の頁である。「39 洗礼者ヨハネの首」では、アントニオや主人公所属の結社と、別のエフォー・アバカラ結社との競合・緊張関係は、「41 降誕祭の前夜」で「エフォーのなぐりこみ」を受けた、メネヒルド出血死の伏線となっている。そして本章に登場する見世物小屋の貼り紙“かがくの驚異洗礼者よはねの首切り入場料10セントボ”（p.229）には、どこか火野葦平『糞尿譚』“衛生舎”の看板を彷彿とさせる斬新さがある。

ヨーロッパ（仏・露）人を両親に持つカルペンティエルがここまで「黒人社会」を知悉しているのは、ルイス老人、ウセビオ、サロメー、実名のロンヒーナとも親交があったからに他ならないが、これはまさしく、ホセ・マリア・アルゲダス（ペルー）、ミゲル・アンヘル・アストゥリアス（グアテマラ）他、前掲のインディオ文学に見られた、著者（白人系）と作品（自然に満ちた地方生活）との関係性と同様である。クロード・ベルナールの『実験医学研究序説』で医師を小説家に置き換えた『実験小説論』のひそみに倣って、文学上「黒人」と「インディオ」を読み替えてみると、本書「序文」（1975）で紹介されたカルペンティエルの手法“土俗的な題材と前衛的な方法論の混淆”が、まさに西洋的な白人文化と土着的なインディオ文化との共存・融合を措定したメキシコ・インディヘニスモ運動とも対応すると考えるのは、あながち見当はずれではないだろう。どうやら作家は、イタリアの前衛主義運動未来主義の美学に可能性を求めていたようだ。

最後に、「1927年8月1日から9日までハバナ刑務所に」という作品付記とセビリャ刑務所との重ね合わせ、また、海賊版の“海賊版”まで出回ってしまったことへの抗議として、キューバ書籍院公認「再版」に警告的な「序文」を敢えて作者が併載して刊行した事実は、やはり、アベリャネーダ作の『続編ドン・キホーテ』（『贋作』）出現への牽制として、『ドン・キホーテ』〔後編〕（1615）を完成したセルバンテスの方法を意識させずにはおかない。ちなみにアレホ・カルペンティエルは、1977年度スペイン《セルバンテス賞》の栄誉に輝いている。